

17.1m2のワンルームが今日からマイスイートホームだ。

「どっこいせ」

爺むさいかけ声とともに段ボール箱をおろし、大袈裟に肩を回す。

「エレベーターがないのがちよつと辛いけどまあいつか、二階だし。イけるイける」

「ふーん。なかなかいいじゃん」

引越業者を見送ったあと、まだ荷ほどきもしてない殺風景な部屋を歩き回って自己満足。

フローリングは綺麗で壁紙も新しく。Wi-Fi環境も整ってる。収納スペースは部屋の右隅、天袋付きで広くとられているのも有り難い。

日当たりの良い角部屋で、ベランダの向こうにはコンクリの堤防で固めた川が流れている。

27歳、独り暮らしの新居としては申し分ない。

もともと贅沢に興味ないし、引越越しに際して持ち込む物も最低限におさえている。

人間起きて半畳寝て一畳とはよく言ったもんで、現在彼氏ナシ婚活興味ナシの気楽な身分ならワンルームで十分だ。

フリーターのカツカツ収入でもなんとか生活費を払っている。

細長いガラス扉の向こうはベランダだ。サンダルに素足を

突っ込んで出て、初秋の爽やかな風を浴びる。

白いフックにはステンレスの物干し竿が二さおとプラスチックの安っぽいハンガーが何個か掛かっていた。

手摺に凭れて上下左右を見回すけど、隣り合ったベランダに住人の姿は見当たらない。

単身者用アパートで、昼は殆どの人がでかけてるといふ不動産屋の説明を思い出す。

前の通りからだど横手の窓のカーテンレールに洗濯物が干してあるのが見えたから、案外部屋干し派が多いのかもしれない。

若い女の子が住んでるならありえる、下着見られるのやだもんね。

「最寄りのコンビニは徒歩4分、駅まで徒歩5分。立地は悪くない、近くには銭湯もある。本来なら一月5万はするでしょ、これ」

指折り長所を数え上げ、手すりに突っ伏してニヤケる。

「事故物件サマサマ」

私の名前は巻波南（まきなみなみ）。職業はフリーター兼事故物件クリナーだ。

そんなものない、とお思いのかた手を挙げて。実はあるんです。

世の中にはあんまり知られてない、ていうか大つびらにはできないグレイな仕事だけど、需要あるところには供給するのが自然の摂理。

ベランダには室外機があつた。ちょうどいい椅子代わりだ。よいしょ、と行儀悪く腰掛けてサンダルをひっかけた足を伸ばす。

ジャージの尻ポケットに突っこんでたスマホが震える。発信者は「巻波冴子」……叔母さんだ。

ボタンを押す。

「はーい」

『引っ越し済んだ？ 連絡しなさいって言ったでしょ』

「大丈夫、今終わったとこ」

『ならいいけど……何も変わったことないわよね』

「何もなくて。いい部屋だよ、気に入った。キッチンやユニットバスも綺麗だし……すぐ横に川が流れてて、犬の散歩する人や子供を自転車の後ろにのつけたお母さんが行き来してる。のどかでいいよ」

心配性でおせっかい、ちよつと過保護な叔母さんに、できるだけ朗らかに返す。

『はあ……我が姪っ子ながらアンタってほんと』

「無神経？ 肝っ玉太い？」

『姉さんに似たのかしらね』

おばさんに似たのかもよ、と心の中だけで茶化し、サンダルからはみ出た足の親指をびこびこ動かす。

『私もこの仕事はじめて長いけど、事故物件に進んで住みたがるのはあんた位よ』

「最初に話持ち込んだのはおばさんでしょ」

叔母は不動産屋の個人経営者だ。

私が最初の事故物件に入居したのは専門学校の時。

バイトで家賃を払えるワンルームをさがしていた若かりし時期、叔母さんがなかなか人が入らない事故物件を抱え困っていた。

もどから幽霊なんて気にしないタイプの私は「そこ借ります！」と飛び付いた。

その部屋は専門学校の卒業と同時に出たけど、夜寝ていると天井や壁が軋んだり、洗面所の鏡に人形の白いモヤが映り込むのは、特に異常もおきなかった。

「こんなに長く続けるなんて思わなかったけど。おばさんが口コミで広めてくれたおかげかな」

事故物件とはその名の通り、事件や事故含む変死の現場となった部屋だ。

殺人現場の一室の他にも老人が孤独死した部屋とかが該当する。

この手の物件には幽霊が出る、霊障が起こる等の噂が付き物で、それだけでなく普通の人は気味悪がつて住みたがらない。

ごく一握りの物好きを除いて。

で、そのごく一握りの物好きが私つてわけ。

「でもさー、事故物件で奥が深いよね。心理的瑕疵物件と事故物件の違いとかさ、本格的にこの仕事するようになって初めて知った」

『心理的瑕疵の範囲は幅広いの。一概に自殺・他殺があつた場所のみとも言えないし……近くにヤクザの事務所があるとかね、何を心理的瑕疵と感じるかは人それぞれよ』

「別に気にしない人もいるもんね」

ちなみに私は気にしない方。人を見た目で判断しないつていえばかつこいいけど、要はヤクザさんでもなんでも、中は実際話してみなきゃわかんないつてこと。

『たとえば大好きなら犬の吠える声も気にしないけど、犬嫌いなら始終イライラしちゃうでしょ』

「うーん、場合によりけりじゃん？ 私も犬スキだけど、しよっちゆう鳴かれちゃたまないし」

『もオ、あげ足とんないで』

タイミングよく、眼下の川沿いの道をゴールデンレトリバー

が歩いていく。リードを握るお爺さんに気付かれないように犬に手をふれば、お義理でしつぽを振り返してくれ、ちよつとだけハッピーになる。我ながら幸せポイントの貯め方がお手軽。

『というか……アンタまだアレやつてるの』

叔母さんの声が急に低まる。

電話の向こうで上品に眉を顰める顔が浮かぶ。

「アレつてなに」

わざととぼける。

『アレつていえばアレよ、悪趣味な料金表。他殺・自殺・その他……だつて、よくそんな不謹慎なの思い付くわね、ぞつとする』

「こつちも仕事だもん、内容に応じた価格設定は大事でしょ。フレキシブルなコンセサンスつてヤツよ」

『よく知りもない横文字を混ぜこむのはやめなさい、逆に頭悪いわよ』

「お婆さんのマネしたのに」

『殴りたい』

「DV反対」

叔母さんが指摘したのは、不動産屋との打ち合わせで毎回提示する条件。

報酬は他殺が一番高くなつてる。

事故物件には告知義務がある。次に入る人に、必ずこの部屋で何があつたか説明しなければならない。

たとえば、旦那の浮気に怒り狂つた奥さんが包丁で刺し殺した事件があつたとする。

すると不動産屋さんは、部屋の内見にきたお客に「この部屋ですね、実はですね、夫婦喧嘩がこじれた末に奥さんが旦那を刺し殺すといつた事件がありまして……」と説明しなきゃいけない。

けれどこの法律には盲点があつて、告知義務が発生するのは「次の人」のみなのだ。したがって二人目以降にはあてはまらない。

私こと巻波南の仕事は「前」の住人が色んな理由で変死を遂げた部屋に入り、履歴をクリーンにすること。もちろん家賃は格安。

どんな事件や事故があつても業者が入つた内装は一新され、口頭なり書面なりご近所の噂話なりで情報もたらさるまで詳細は不明なケースが多い。

『……こつちの世界に引つ張り込んだ私が言えることじゃないか』

叔母さんがしんみり独白。湿っぽい空気は苦手だ。仕事を幹旋してくれる叔母さんに感謝しこそすれ、恨むなんてとんでもない。

「と・に・か・く！ 私は元気でやつてるから心配しないで、またなんかあつたら電話するから」

『わかつた。たまには顔見せるのよ。食事もお弁当頼みじゃなくて、ちゃんと自炊しなさいよ』

「わかつてるつてもー、じゃあね」

スマホを切つて部屋に戻る。

「ふー……」
さて、やるか。

荷物の中から歯ブラシ立てを取り出す。続いて取り出したのはお線香を一本。歯ブラシ立ての筒にお線香を入れ、マツチを擦つて先端に火を移す。

これが私の入居の儀式。

たかが自己満足、されど自己満足。やらないよりは気持ち的に楽になる。

顔も名前も知らない前の人を簡単に吊つて、お線香の煙が窓の外の、夕焼け空に流れていくのを見守る。

事故物件っていうのは、実は私たちの生活圏内にたくさんある。どうかすると一軒のアパートが数部屋抱えてる、な

んでケースも起こり得る。

空前の少子高齢化社会、お年寄りの孤独死は今じゃ当たり前で、テレビ新聞雑誌は毎日のように残酷な事件を報道している。

だから身近に事故物件があつたつてちつとも驚きやしない。おかげで事故物件クリナーの私はひっぱりだこ。ただ部屋に居座るだけで家賃はおまけしてもらえ、契約満了の折には別途報酬をもらえるんだから楽な仕事だ。

でも、コレだけじゃ食べていけないのも哀しいかな世知辛い現実。

「いらつしやいませー」

自動ドアが開いてお客さんが来店する。陳列の手を止めて振り返り、声を張つて挨拶する。

アパートに引越してから二週間後、私は近くのコンビニでバイトを始めた。例の徒歩2分で行けるコンビニだ。素晴らしいしかな職住接近。

買い物に行つたらウインドウにバイト募集の貼り紙が出されてたんで、即飛び付いた。

普段使いのコンビニで働くのはなんとなく気まずいから避けるって人もいるけど、私はそういうの全然気にしない。

バイト帰りに買い物もしていけるから逆にお得、廃棄処分になつたお弁当やおにぎりも貰えるし。

幸いバイト先の仲間は皆いい人で、馴染むのに時間はかからなかった。

端末をバーコードに翳して検品していた時、突如頭上から声をかけられる。

「あの、ちょっと聞きたいんですけど」

「はい、なんでしょうか」

鉄壁の接客スマイルで顔を上げ、ちよつと驚く。イケメンがいた。学ランにダツフルコート、赤と緑のチェックのマフラを巻いた男の子。

学校帰りに見える彼は、何故か言いにくそうに口ごもる。

「花をさがしてるんです」

「花ですか？」

「はい……お墓にそなえるような」

「ああ、花束ですね。少々お待ちください」
お盆やお彼岸の時期になると、コンビニでも花束をよく見かける。それ以外でも霊園の近くのコンビニなら、割と普通に販売しているのは知られていない。

一応、私の働くコンビニにもおいてある。

男の子が少し驚いて目をしばたたく。

「よかった、あるんだ。前は違うところで買つてたんだけどそつちが潰れちゃって……」

「そういえば見えない顔だ。常連さんじゃない。」

「昼は表においてたんですけど涼しくなりましたから、萎れないように中に引つ込めたんです。バスで一駅の所にお寺があるから、たまに買つていかれる方がいるんです。年配のお客様に多いんですけど……」

「すいません」

「え？」

「いや……場違いで」

思わず吹き出す。

「買ってくれるお客さんに場違いなんてありませんよ」

冗談めかして返せば、男の子の顔の強張りがほぐれて、はにかみがちな笑みが上る。

男の子を案内してカウンター横に回り込む。A→Mの装置の隣、新聞のラックの死角となるわかりにくい場所に黒いバケツがあり、透明なセロハンで包まれた花束がまとめて生けられている。

「ここにあつたんだ……ありがとうございます、全然気付かなかつた。A→Mに人いたから見るの後回しにしてた」

「こつちこそ、目立たない場所で追いやつちやつてすいません」

ちよつと可哀想なこととしたなど、斜めに傾いだ花束を直してやる。

「やっぱり今の時期に買つてく人つて少ないですか」

「ですなあ、お彼岸お盆とはズレてるし」

男の子の質問になにげなく答えてから、脳裏にふと疑問が浮かぶ。

「あの……私からも聞いていいですか」

「はい？」

「前買つてたコンビニが潰れちやつたんならお花屋でもいいんじゃないですか？ ここよりずつと種類豊富ですし、ちよつと行つた先にありますよ」

ああ馬鹿、余計な事言つた。せつかく来てくれたお客さんをもむぎむぎ逃がすような失言を。

後悔した時には遅く、私はぼかんとする男の子に指さし、花屋の場所を教えていた。

すると男の子は氣まずそうに俯き、何故だか頬を赤く染める。

「知ってます」

「え、知つてたんですか。それじゃなんで」

「……恥ずかしくて」

「はあ？」

「花屋つて女の人しかいないでしょ。男が紛れ込むの、コンビニ以上に場違いかなつて。やつてる人も買いに來るのも女の人だし」

今度はこつちがあつけにとられる番だ。

我慢できず吹き出す。

「わ、笑わないでください」

「ごめんほんとごめん……で、でも想像したらツボにはまっちゃって」

ダブルコートがお似合いのイケメンくんが、女の子ばかりの花屋に入るに入れず、結局素通りしてコンビニに来たつていうのは、なんとも微笑ましくて好感度が上がる。

「いいと思うけどなあ、男の子が花屋にいても。全然気にすることないのに」

軽い口調で笑顔でフォローし、すっかり恥じ入ったイケメンに花束を渡す。

「こちらでいいですか」

「はい」

「じゃあお会計を」

レジに入って会計を済ませる。千円札をもらいお釣りを渡す時、一瞬指が触れ合っただけとする。睫毛が長い女の子。

「ありがとうございます」

律義に頭を下げて自動ドアから出て行く後ろ姿に、「ありがとうございます、またお越しください」と声をかける。

「一目惚れしちゃった？」

休憩から戻ってきた同じシフトの夏見さんが、私の脇腹を

突付いて囁く。

「は？ 学生ですよ」

「南ちゃんもハタチそこそこに見えるし釣り合いとれるんじゃないの？」

「馬鹿言わないでくださいって、まあ目の保養にはなりましたけど」

「恋愛には興味ないの？」

夏見さんは四十代、既婚の主婦だ。高校生の息子と中学生の娘がいるらしい。

他人の色恋沙汰が大好きで、何かというとその手の話を吹っかけてくるけど、面倒見がよく決断力があるので皆に頼りにされる。

「お客様は神様だろ！」と声を荒げるクレマーに、「それを決めるのは接客する側であって、お客様ご自身が断じることではございません」とやりこめた痛快エピソードは語り草になつてる。

「興味ないってゆーか……そりゃーいい人いたら付き合いたいな、とは思いますけど……」

「南ちゃん27でしょ、うかうかしていると婚期逃がして干物女になっちゃうわよ。高校生でもなんでもイケメンいたら睡付けときなさいよ」

「あはは。お客さんきましたよ、いらっしやいませー」

さつきはたちそこそこに見えるって言わなかったかオイ。

(以下続)